

茨木・総持寺蔵 閻魔王像及び司命・司録像

桑野 梓

形状 膝高 (左) 17.4 (右) 17.4

1、閻魔王像 【図1、4～6】

冠帽（基部は紐1条の間に連珠文帯、両側に笄を挿す。正面中央に牌を付け、「王」の字を書く。）を被る。眉根を寄せ、瞋目し、開口して舌、上歯下牙をあらわす。髭、鬚、髯をあらわす。大袖衣、道服を着け、腰帯を締め、正面から蔽膝を垂らす。袴を着け、沓を履く。両腕は屈臂し、左手は掌を下にして大腿部上に置き、右手は笏を執る。右足を前にして畳座上に安坐する。

2、司命像（向かって右）【図2、7～10】

冠帽を被る（両側に笄を挿す）。眉根を寄せ、瞋目し、開口して舌、上下歯をあらわす。鼻孔を穿つ（不貫）。花卉形の襟のついた唐服をまとう。腰帯を締める。袴をはき、沓を履く。両腕は屈臂し、両手で卷子を開いて執る。右足を立て膝とし、左足を踏み下げて虎皮を敷いた床几に坐す。

3、司録像（向かって左）【図3、11～14】

巾子冠を被る（両側に笄を挿す）。眉根を寄せ、瞋目し、閉口する。鼻孔を穿つ（不貫）。闕腋の袍をまとう。筒袖衣、鱗袖衣を着す。腰帯を締める。天衣（カ）を腰帯の左右に挟む。袴をはき、長沓を履く。右手は掌を上全指を曲げて筆を執り、左手は顔の横まで掲げて卷子を執る。右足は膝を外に倒し、左足は立て膝として、豹皮を敷いた床几に坐す。

法量（単位：センチメートル）

1、閻魔王像

像高	101.2	髮際高	76.4
頂一顎	47.2 (冠頂より)		
面幅	18.4		
面長	20.4 (冠下端より)		
耳張	22.3	面奥	23.1
胸奥 (左)	33.0	(右)	32.5
腹奥	35.7	肘張	74.5
裾張	111.6	膝張	86.6
膝奥	56.0	座奥	70.0

2、司命像

像高	49.7		
像高	69.6 (垂下する足元まで)		
髮際高	60.9	頂一顎	20.6
面幅	9.1	面長	10.2
耳張	11.8	面奥	12.6
胸奥 (左)	13.2	(右)	12.5
腹奥	14.6	肘張	28.9
膝張	42.7	座奥	32.8
膝高 (左)	8.2	(右)	18.9
床几高	22.3		

3、司録像

像高	49.8	髮際高	41.9
頂一顎	19.2	面幅	8.7
面長	10.2		
耳張	12.3	面奥	13.0
胸奥 (左)	14.5	(右)	14.1
腹奥	14.5	肘張	35.7
膝張	39.2	座奥	33.3
膝高 (左)	22.3	(右)	7.8
床几高	22.5		

品質構造

1、閻魔王像

頭部の構造の詳細は不明。差首とする。体幹部は前後2材とする。さらに背面に1材を矧ぎ足す。両肩以下別材とする。両肩以下を前後2材とするカ。両脚部は横1材製とする。さらに前方に裳先を含めた1材を足す。左右に広がる裾を前後2材とする。左裾後方に三角形の小材を足す。両手首から先は差し込み矧ぎとする。玉眼は、瞳は黒塗りとし、内から金、朱、黒で輪郭を描く。目頭、目尻に朱をさす。表面は、肉身は朱、着衣は、黒漆塗り白下地の上彩色を施す。道服は、群青地に朱、緑青等で雲を描く。両肩前に、龍の盛り上げ彩色を施す。像底は黒漆塗りの上、布貼りを施す。

2、司命像

頭部の構造の詳細は不明。差首とする。体幹部は前後2材とする。さらに背面に1材を寄せる。両肩以下別材とする。臂、手首で矧ぐ。袖の後方を別材製とする。左足大腿部前方から、右足の立て膝手前にかけてを横1材製とし、左足踏み下げ部、右足立て膝部を各別材製とする。両足先別材製。玉眼は瞳を黒塗りとし、内から朱、金、黒で輪郭を描く。目頭と目尻に朱をさす。表面は、白下地の上彩色を施す。右足膝部、左足内側脛部などに宝相華文を盛り上げ彩色であらわす。

3、司録像

頭部の構造の詳細は不明。差首とする。体幹部は前後2材とする。さらに背面に1材を矧ぎ足す。両肩以下別材とする。臂で矧ぐカ。手首で矧ぐ。袖の後方別材製。両脚部は横1材製とする。両腰脇に三角材を矧ぐ。左足先別材製。玉眼は、瞳は黒塗りとし、内から金、黒で輪郭を描く。目頭と目尻に朱をさす。表面は、白下地の上に彩色を施す。朱の衣の各所に緑青で唐草文を描く。各所に宝相華文を盛り上げ彩色であらわす。

保存状態

1、閻魔王像 笏、豊座以上後補。

2、司命像 右手第4指先、左手第2、3指先、床几以上後補。持物は取り外し不可。

3、司録像 床几後補。笏右側欠損。左手持物は取り外し不可。

備考

総持寺は、西国三十三所観音霊場第22番札所として知られる古刹である。創建は、藤原山蔭が香木を求め千手観音を造立し、これを道場に安置し、総持寺と号したことにはじまるとされる。

ここで紹介する閻魔王像及び司命、司録像は、いずれも寄木造で玉眼を嵌入し、表面には彩色を施す。閻魔王像は、大きく目を見開き、怒りをあらわした表情である。威儀を正し、堂々とした姿で、観る者に地獄の恐ろしさを存分に伝える圧倒的な存在感をもっている。また、司命、司録像は、司命が口を開いて厳しい表情であるのに対し、司

録は閉口し、怒りを内に籠めたような表情である。司命、司録像は、服制を違えて足の組み方も左右で異なっている。脇侍を非対称とすることで、全体に動きがでており、より現実的な印象を与えている。以上のような一種生々しいともいえる現実的な表現は、制作時期の下降を思わせ、19世紀初めから半ばころにかけて、幕末頃の作であろう。

ところで3像は現在、不動堂脇壇に安置されている。本来の安置場所については、総持寺蔵「明治七年境内絵図」に「閻魔堂」とあることから、ここに安置されていたと考えられる。「閻魔堂」は、寛政10年(1798年)ころの境内を描いた「摂津名所図会」には描かれていないことから、これ以降、明治7年(1874年)までに創建された建物であると考えられる。よって3像の制作時期もこの期間と考えられ、作風からみた制作年代と齟齬をきたさない。

江戸時代に入ると、庶民信仰の急激な展開に伴って社寺詣が盛んに行われた。なかでも西国三十三所観音霊場巡礼(以下、西国巡礼)は特に人気のコースで、巡礼の庶民化が進んでいった(註1)。その始まりについては、大和長谷寺の徳道上人が、閻魔王から三十三所観音霊場の功德を広めるよう仰せを受け、その証として宝印を授かり摂津中山寺に安置、その後途絶えていた巡礼を花山法皇が仏眼上人とともに復活した、というエピソードが語られる(註2)。これは、「西国巡礼をすれば地獄に落ちず、極楽浄土へいける」と、よりわかりやすい形で巡礼の功德を説いているのであり、また同時に、巡礼を極楽往生の思想と結びつけている。さらに、江戸時代には仏の世界や六道の世界を実体験するような、群像による場面表現が多くなされるようになった。視覚的にもわかりやすく表現することで、仏教の世界を身近に感じ、巡礼を娯楽性の強いものへと変化させていった。

3像が制作された時期は、西国巡礼の機運も高まり、総持寺に多くの巡礼者が訪れた。このような中で、閻魔王像が造像されたと考えられるのである。

実査 平成28年4月28日(高橋伸拓・中東正之・中澤和子・桑野梓)。

註

1) 吉井敏幸 2000 「西国三十三所の成立と巡礼寺院の庶民化」『観音信仰事典』戎光祥出版、pp. 351-368

2) 巡礼のはじまりを説いた『中山寺縁起』は、慶安頃の成立とされる（戸田芳実・田中智彦「西国巡礼の歴史と信仰」『観音信仰事典』戎光祥出版、pp. 340-350）。また、中山寺閻魔堂には、18世紀初頭の作とされる閻魔王像などの群像が安置される（龍谷大学龍谷ミュージアム 2012 『“絵解き” ってなあに？語り継がれる仏教絵画』）。

その他参考文献

松崎憲三 1989 「閻魔信仰の系譜—日本人の地獄・極楽観についての覚書—」『日本常民文化紀要』14、pp. 1-35

田村正彦 2013 「圓福寺（春日部市）「閻魔王宮と八大地獄図」とその開帳—信仰と娯楽の狭間で—」『仏教藝術』326、pp. 59-84

井阪康二 2009 「西国三十三所観音巡礼信仰と中山寺の地獄極楽信仰との関わり」『久里』23、pp. 39-52

追記

3 像の現在の安置場所について「不動堂」としましたが、「閻魔堂」の間違いでした。但し、閻魔堂は近年の新造であり、3 像の制作時期に関しては、考慮に値しません。



图1 閻魔王像 茨木市・総持寺



图3 司録像 茨木市・総持寺



图2 司命像 茨木市・総持寺



图4 閻魔王像（背面）



图5 閻魔王像（左側面）



图6 閻魔王像（右側面）



图7 司命像（背面）

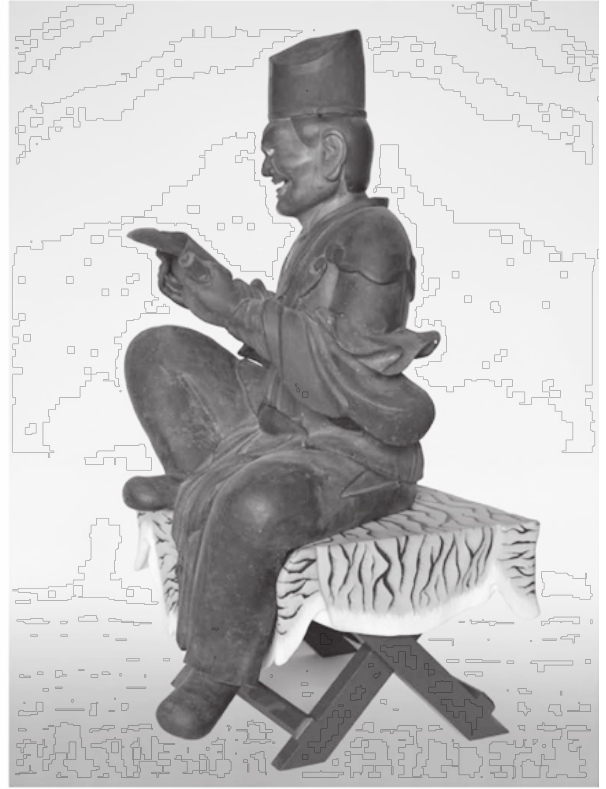


图8 司命像（左侧面）



图9 司命像（右侧面）



图10 司命像（头部左斜侧面）



图 11 司録像（背面）



图 12 司録像（左側面）

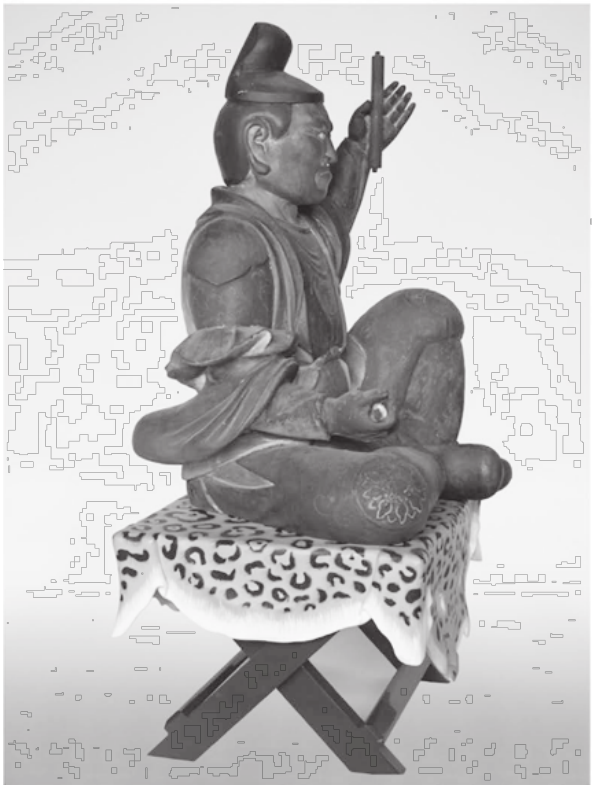


图 13 司録像（右側面）



图 14 司録像（頭部右斜側面）